

父親同士の交流の現状と可能性

— 子どもをきっかけとした父親同士の関係性がもたらす効果 —

上席主任研究員 宮木 由貴子

目次

1. 研究の背景と目的	2
2. 父親の対人関係の状況	3
3. 父親同士の交流実態と意識	4
4. 母親からみた父親同士の交流	9
5. 父親同士が交流することによる効果の可能性	10
6. おわりに	12

要旨

- ① 父親における子育てのあり方について関心が高まる中、父親同士が交流することについても関心が高まりつつある。本稿ではこれについて調査を実施した。
- ② 子どもを介して知り合いになった父親同士で、あいさつ程度以上の付き合いがあるという人は6割強だった。交流のきっかけは「子どもの遊び友だちを通じて」「近所に住んでいる」「母親（妻）同士が知り合いである」というケースが多い。
- ③ 父親同士の交流においては、イベントやテーマがないと交流しにくいという声が多い。実際に、子どもがスポーツ系の課外活動、特にスポーツチームに入っており、それらの活動に積極的に関与している父親では、関与がない父親より交流が多い。
- ④ 母親において父親同士が交流することを望む声は多い。理由としては、父親に仕事以外の友人を持ってほしい、子育てにより関心を持ってほしいというものがあげられた。
- ⑤ 父親同士の交流により、父親自身の交流の広がりや地域参加の機会発生、さらに仕事上の対人交流ヒントを得るなどのメリットが期待される。また、子どもにとっても父親とのコミュニケーションが増えるほか、様々な大人と交流する機会が増すなどのメリットがある。母親の満足度向上やストレス軽減にもつながる可能性がある。

キーワード：イクメン、コミュニケーション、パパ友

1. 研究の背景と目的

子どもを介した親同士の交流については、一般に母親同士の友人関係（いわゆる「ママ友」）として語られることが多い。母親同士のネットワークは、子育て関連の情報交換やストレス解消などの効果が認められる一方で、対人折衝上のストレス源ともなるなど、その効果には正負の側面がある点について筆者は指摘した（宮木 2004）。

一方で父親についても徐々に変化がみられている。今日、厚生労働省が主導する「イクメンプロジェクト」など、男性の積極的な子育て関与推進や男性の育児休業取得推進等により、子育てをする男性が増加しているとされる。自治体等においても、父子イベント（コミュニティ形成、キャンプ、料理教室など）の開催や、父子手帳（例：東京都の「父親ハンドブック」）の発行など、父親の子育てを推進する企画が積極的に行われている。こうした動きに伴い、父親同士が交流する機会が創出され、「パパ友」という呼称を使う人も出現している。

そこで、実際に父親同士の交流の現状と評価について明らかにするため、長子が小学生以下の子どもを持つ30・40代の父親とその配偶者を対象にアンケート調査を実施した。調査の概要と主な属性については図表1のとおりである。調査結果を補完すべく父親に対するヒアリング調査も加えて実施した。

本稿では、小学生がいる30・40代の父親の対人関係の実態と友人関係満足度について概観する。続いて父親同士の交流の現状・意識と、父親同士の交流についての母親の意識について述べ、父親同士の交流がもたらす効果についてまとめる。なお、本研究で扱う父親の交流とは、いわゆる「おやじの会」のような組織や加入を必要とするものではなく、友人関係に近いプライベートなつながりである。

図表1 調査概要と主な属性

調査概要		<ul style="list-style-type: none"> ■ 調査対象：1都3県(東京・神奈川・埼玉・千葉)に在住で小学生以下の子ども(長子)を持つ男性694名と、その妻のうち協力を受諾した女性490名 ■ 調査方法：クロス・マーケティングのモニターを用いたインターネット調査 ■ 調査時期：2013年10月 						
主な属性	父親			母親(回答者の妻)				
	年代	父親		年代	母親(回答者の妻)			
		30代	人		%	20代	人	%
	40代	313	45.1	30代	14	2.9		
	東京	381	54.9	40代	251	51.2		
	居住地	神奈川	268	38.6	40代	220	44.9	
		埼玉	173	24.9	50代	5	1.0	
		千葉	133	19.2	職業	正社員・公務員・団体職員	134	27.3
	長子性・年齢	男児	未就学	125	18.0	パート・アルバイト・派遣社員・内職	88	18.0
			小学校低学年	113	16.3	専業主婦	247	50.4
小学校高学年			114	16.4	無回答	21	4.3	
女兒		未就学	120	17.3				
		小学校低学年	116	16.7				
		小学校高学年	106	15.3				

2. 父親の対人関係の状況

(1) 日常的な交流

まず、父親における日常的な交流についてみる（図表2）。「友人と食事をする・飲みに行く（職場の人を除く）」については、全体的に父親より母親でやや頻度が高い。父親で母親より顕著に多いのは「職場の人や仕事関係の人と就業後に食事をする・飲みに行く」であり、父親と母親（有職）を比較すると「ほとんどない」について22.3ポイントの差がみられた。通信メディアを使った交流についてみると、メールのやりとり、SNS の利用、電話での通話のいずれも母親より父親で「ほとんどない」とする人が多く、交流頻度も母親で高い。全般的に、父親の交流が職場の人に集中しがちであることがわかる。

当研究所が実施した「40・50代の不安と備えに関する調査」（2014年）においても、「仕事以外の友人をもつこと」を重要であると考えている人が男女ともに多いにもかかわらず、それができているとする割合は女性で64.6%であるのに対し男性で47.7%となっている（図表省略）。また、同調査からは、全体的な対人関係の多様性についても、男性で女性より低い傾向が確認されている。

図表2 日常的な交流の頻度

(単位: %)

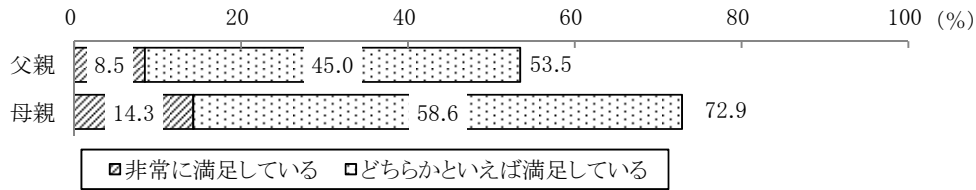
			ほぼ毎日	週に数回程度	週に1回程度	月に2回程度	月に1回程度	数ヶ月に1回程度	半年に1回程度	年に1回程度	ほとんどない
対面コミュニケーション	友人と食事をする・飲みに行く(職場の人を除く)	父親	0.6	1.0	4.3	5.3	14.4	23.1	12.7	12.4	26.2
		母親	0.2	1.8	7.1	11.4	15.7	24.5	11.0	6.7	21.4
	職場の人や仕事関係の人と就業後に食事をする・飲みに行く	父親	0.6	2.5	7.0	10.0	19.9	23.7	10.3	6.4	19.7
		母親	0.0	2.1	4.6	2.5	13.9	15.1	10.1	9.7	42.0
通信メディアコミュニケーション	友人とのメールでのやりとり(SNSでのメッセージのやりとり除)	父親	4.9	11.8	13.3	7.6	12.5	13.7	6.5	3.6	26.1
		母親	25.5	28.2	11.0	8.2	7.1	6.3	1.2	1.0	11.4
	友人とのSNSでのメッセージのやりとりや投稿・コメント(いいね!のクリックなどは除く)	父親	6.1	9.2	7.3	3.6	6.1	5.0	2.6	1.0	59.1
		母親	14.7	14.5	6.7	3.1	6.1	2.0	0.8	0.2	51.8
	友人のSNSでの投稿を読んだり「いいね!」をクリックする(読むだけ)	父親	10.1	8.5	7.2	3.0	4.3	3.3	2.2	1.2	60.2
		母親	15.3	11.4	5.7	2.4	4.3	2.7	0.6	0.4	57.1
友人と電話で話をする(通話)	父親	0.7	4.0	7.2	6.8	12.7	16.1	8.9	8.4	35.2	
	母親	3.9	16.7	16.7	13.7	15.1	10.6	4.9	2.4	15.9	

注:「職場の人や仕事関係の人と就業後に食事をする・飲みに行く」の母親の回答は、有職者のみ(n=222)

(2) 友人関係満足度

続いて、友人関係満足度について父親と母親の状況を比較したものが図表3である。「非常に満足している」と「どちらかといえば満足している」の合計値は、母親で72.9%であるのに対し父親で53.5%となっており、その差は19.4ポイントに及ぶ。対人交流頻度が高く、利用する通信メディアも多様である母親に対し、対人関係が職場の交流に集中しがちな父親では、友人関係満足度がそれほど高くない様子が確認された。

図表3 友人関係満足度

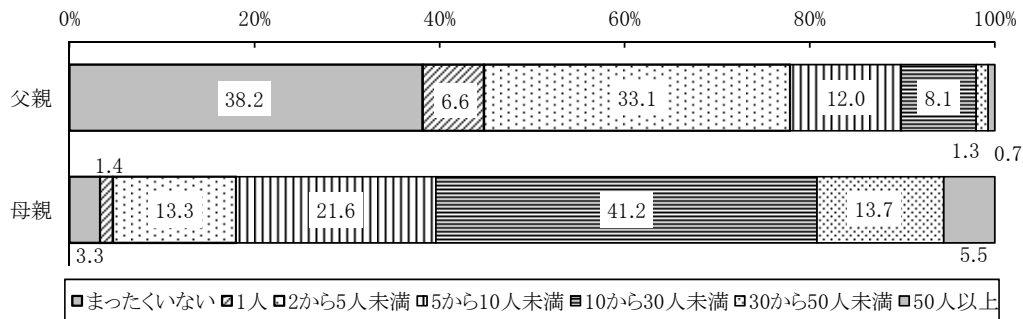


3. 父親同士の交流の実態と意識

(1) 父親同士の交流の有無

「子どもを介して知り合いになった父親・母親同士で、あいさつ程度以上の付き合いがある人」（以下、「付き合いがある人」）の人数をたずねたところ、「付き合いがある人」が「まったくいない」とした割合は父親で38.2%となっており、6割強の人で知り合い程度のあるとされた（図表4）。「2から5人未満」程度の「付き合いがある人」がいる人は33.1%、すなわち3人に1人となっており、「5人以上」いると回答した人は2割強だった。一方、母親の回答をみると、最も多いのは「10から30人未満」で、41.2%を占めた。また、約2割が30人以上と回答している。「まったくいない」とする割合は3.3%にすぎなかった。子どもを介した交流の状況が、父母で大きく異なっていることを示す結果である。

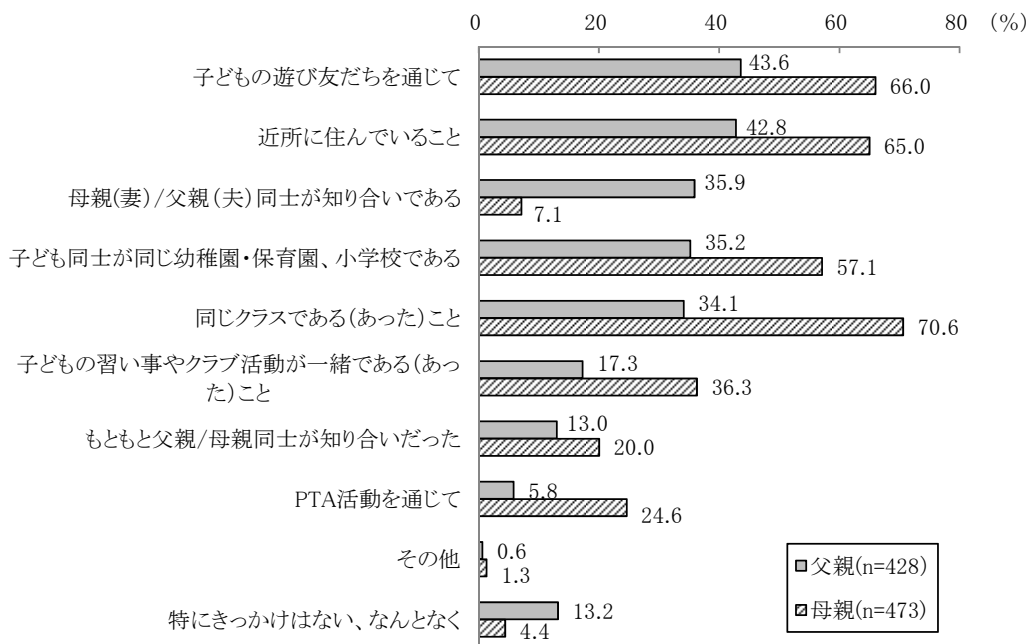
図表4 子どもを介して知り合いになった父親・母親同士であいさつ程度以上の付き合いがある人



(2) 父親同士の交流のきっかけ

父親同士の交流がある人に対して、交流のきっかけについて尋ねたところ、「子どもの遊び友だちを通じて」（43.6%）との回答が最も多く、「近所に住んでいること」（42.8%）が僅差で続いた（図表5）。これに「母親（妻）同士が知り合いである」が35.9%で続いている。「特にきっかけはない、なんとなく」を除くと、「母親（妻）同士が知り合いである」は唯一、父親の回答が母親の回答を上回った。父親同士の交流人数と母親同士の交流人数には正の相関（相関係数0.362、1%水準で有意、図表省略）があり、妻における母親同士の交流が活発だと、そこから派生して父親同士の交流も活性化されるケースが多い様子が見えてきた。

図表5 親同士の交流のきっかけ＜複数回答＞



注:「子どもを介して知り合いになった父親/母親で、あいさつ程度以上の付き合いがある人」のみ

(3) 子どもの課外活動参加と父親同士の交流

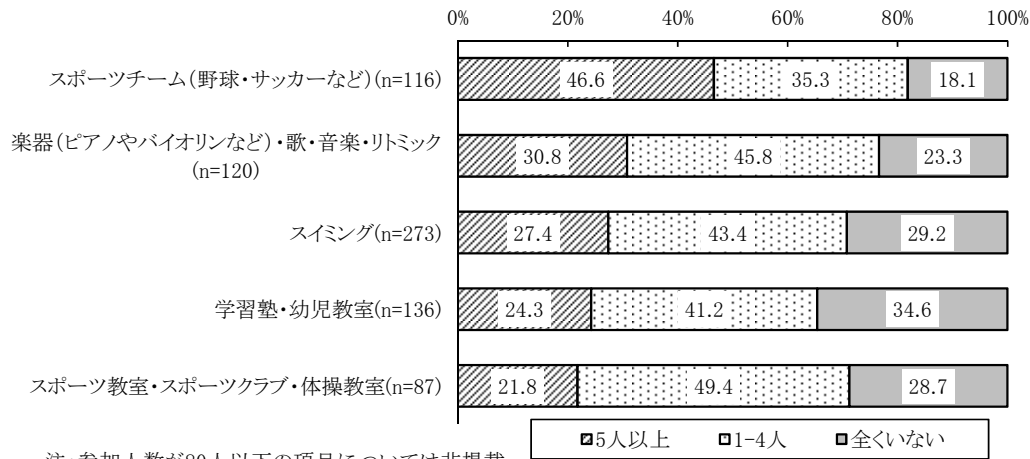
続いて、子どもの課外活動の状況と父親同士の交流についてみる。子どもたちの課外活動参加状況をみると、運動系活動に参加しているのは男子212人・女子158人、文化系活動に参加しているのは男子147人・女子187人となっていた（図表省略）。

子どもの活動内容別に父親同士の交流の状況をみると、子どもが「スポーツチーム」に参加している父親の46.6%が、5人以上の父親同士の交流があると回答しており、子どもがスポーツチームに参加しているケースで最も父親同士の交流がある様子が顕著だった（図表6）。スポーツチームとは野球やサッカーなどで、特に男児の参加割合が高い。スポーツチームでの活動は他者とかがかわることが多く、チームワークや役割分担などが求められる。小学生以下のスポーツチームの場合、練習や試合などの機会に親がチームに関与することも多く、必然的に親同士の交流も発生しやすい。

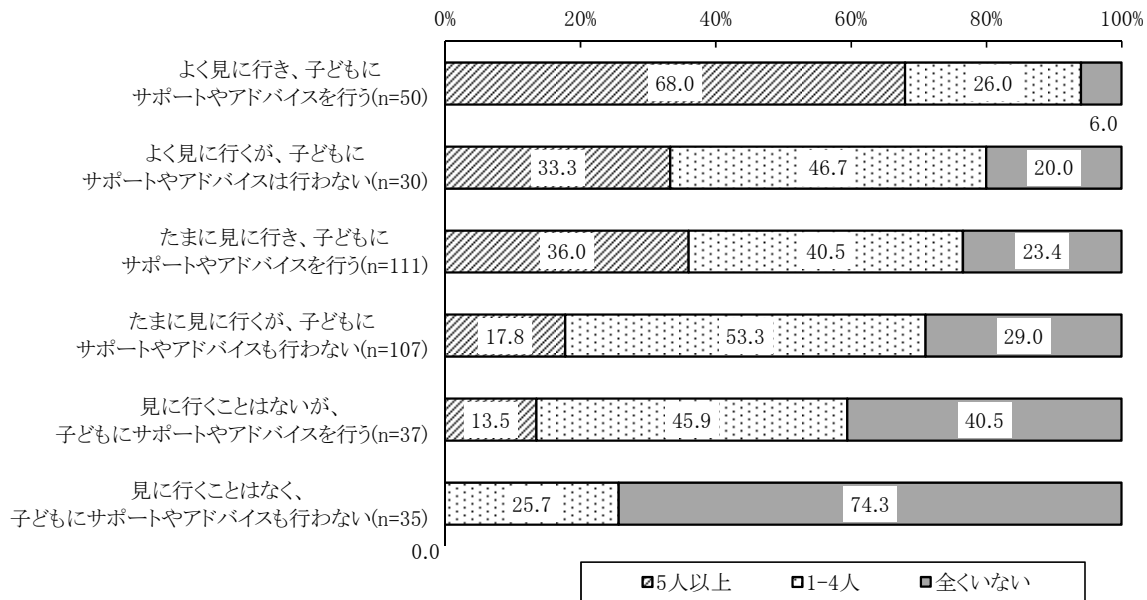
さらに、子どもの運動系活動に対する父親の関与度合い別に父親同士の交流の状況についてみると、子どもの活動について「よく見に行き、子どもにサポートやアドバイスを行う」父親では9割以上に交流があり、人数も多かった（図表7）。「よく見に行くが、子どもにサポートやアドバイスは行わない」「たまに見に行き、子どもにサポートやアドバイスを行う」と回答した人についても、8割程度に父親同士の交流がみられた。「たまに見に行くが、子どもにサポートやアドバイスは行わない」「見に行くことはないが、子どもにサポートやアドバイスを行う」と回答した人の順に父親同士の交流が「全くいない」とする人が増加し、「見に行くことはなく、子どもにサポート

やアドバイスも行わない」とする人では「全くいない」が7割を超えた。子どもの運動系の活動参加への関与が父親同士の交流に影響する可能性を示唆する結果である。なお、文化系活動についても父親の関与が高いほど父親同士の交流が認められたが、運動系ほど関与の度合いによる差異はみられなかった（図表省略）。

図表6 父親同士の交流人数(子どもの活動内容別)



図表7 父親同士の交流人数(子どもの運動系活動に対する父親の関与度合い別)



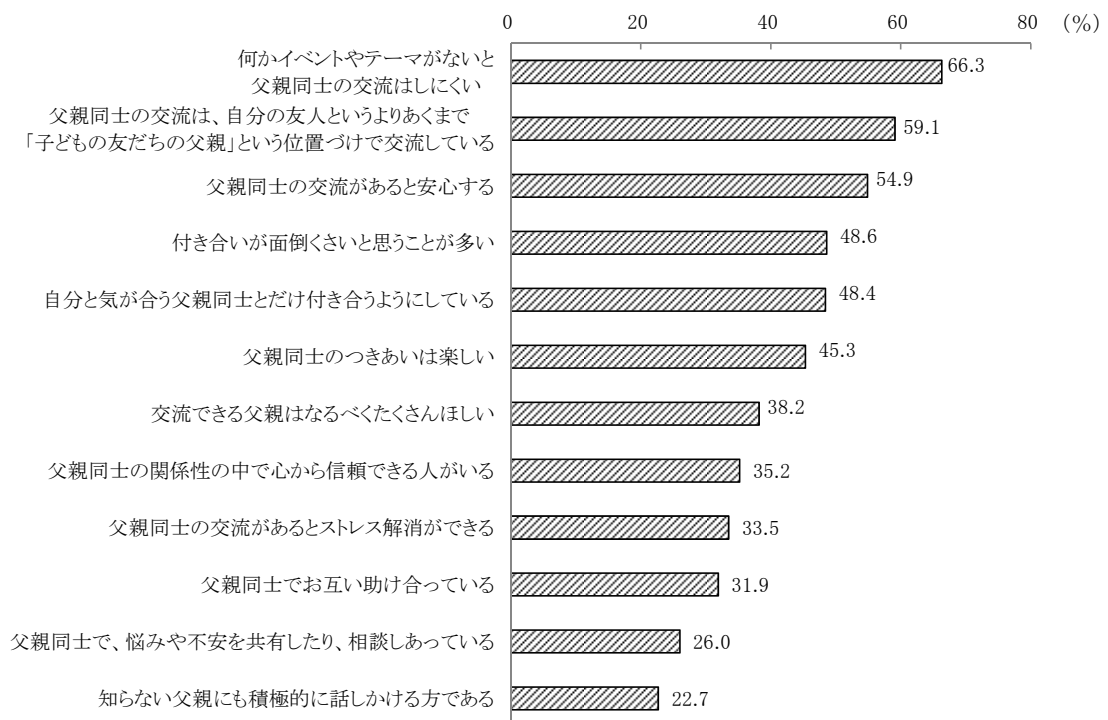
(4)父親同士の交流に対する意識

父親同士の交流がある人に対し、父親同士で交流することについての意識を尋ねた。最も回答が多かったのが「何かイベントやテーマがないと父親同士の交流はしにくい」で、66.3%があげた（図表8）。一般に、とりとめのないおしゃべりを楽しめる女性に

比べ、男性はテーマのないコミュニケーションが不得手な人が多いとされる。これにより、例えばスポーツチームのような「イベントやテーマ」は、父親同士のコミュニケーションにおいて有効に作用すると考えられる。

2位以下は「父親同士の交流は、自分の友人というよりあくまで『子どもの友だちの父親』という位置づけで交流している」(59.1%)、「父親同士の交流があると安心する」(54.9%)、「付き合いが面倒くさいと思うことが多い」(48.6%)と続いている。

図表8 父親同士の交流に対する意識



注:父親同士の交流があると回答した人のみの回答(n=463)で、「そう思う」と「まあそう思う」の合計

(5) 父親同士の交流の評価

父親全員に対し、父親同士が交流することに対する評価を尋ねたところ、最も多かったのは「これまで接点がなかった年齢・業種の人と知り合える」であり、69.0%が回答した(図表9)。「利害関係の少ない人間関係を作ることができる」(56.3%)も過半数を占めるなど、職場以外の対人関係を形成できることへの評価が高かった。

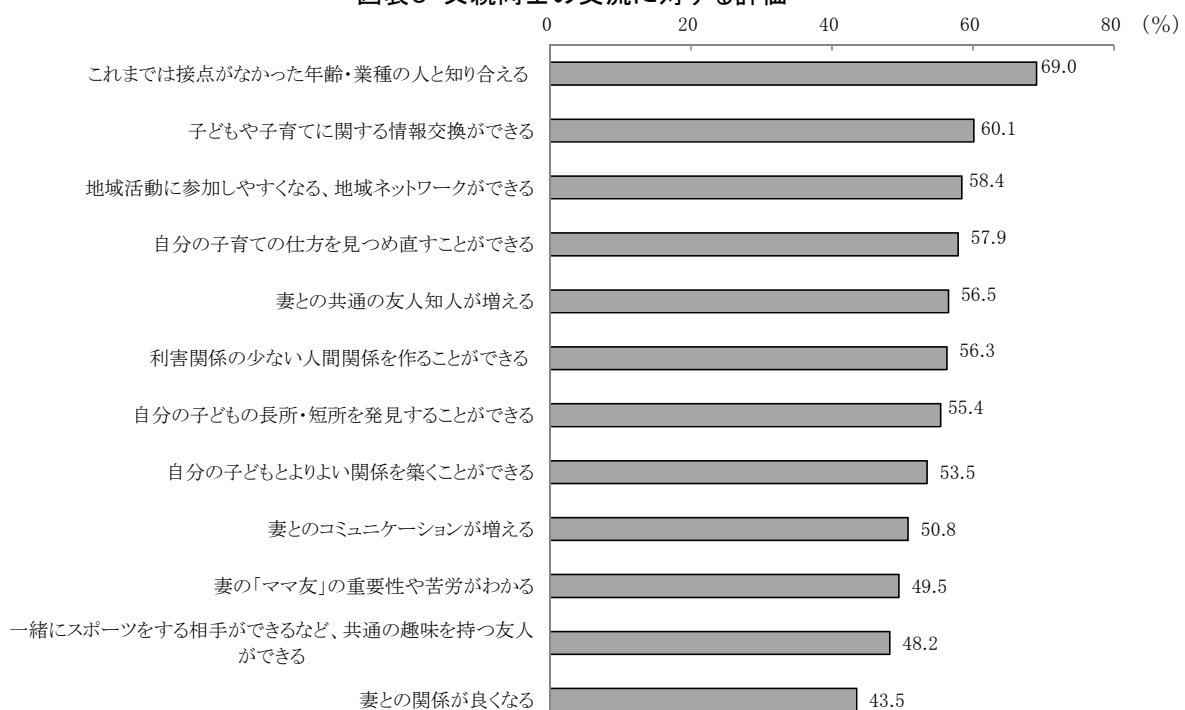
また、2位にあげられた「子どもや子育てに関する情報交換ができる」(60.1%)や、「自分の子育ての仕方を見つめなおすことができる」(57.9%)、「自分の子どもの長所・短所を発見することができる」(55.4%)、「自分の子どもとよりよい関係を築くことができる」(53.5%)のように、子育て関連のものや子どもとの関係性の良好化に関する回答も過半数を占めた。

さらに「地域活動に参加しやすくなる、地域ネットワークができる」という意見も

58.4%と約6割があげ3位を占めた。通常、小学生以下の子どもは自宅の近所でネットワークを形成することが多いため、地域とかかわることが多い。したがって、子どもたちを介したネットワークを形成することで必然的に地域とつながるケースが多くなる。その結果、日頃職場を主な活動フィールドとする父親の交流領域が広がり、父親の地域ネットワークの形成を促進する、もしくは生み出すと考えられているのではないだろうか。

加えて、「妻との共通の友人知人が増える」(56.5%)、「妻とのコミュニケーションが増える」(50.8%)など、妻とのコミュニケーション活性化も半数程度があげた。

図表9 父親同士の交流に対する評価



注:「そう思う」と「まあそう思う」の合計

(6) 父親同士の交流に関する父親の自由回答

さらに父親同士が交流することへの評価についての自由回答をみる。ポジティブな意見としてあげられた特徴的な回答は、仕事以外でのネットワークができること、地元・近所でのネットワークができることによる地域への愛着の高まりや、飲み会などの交流機会の増加である。特に、職場や仕事の延長線上では交流機会を持つことがないと思われる人と交流する機会が持てることで、様々な刺激を受けることがあるとの意見が寄せられた。既述したように、父親は母親に比べて交流が職場に限定されがちだが、父親ネットワークを交流の幅を拓ける機会の一つとして位置づけている人が散見された。また、ゲームやスポーツ、アウトドアといった活動を行うことにより、自分の得意分野の能力を発揮する機会も発生している。一般的なコミュニケーションの

形態として、女性が「おしゃべり」自体を楽しめるのに対し、男性は「モノやコト」を介してコミュニケーションをとることが多いとされる。実際にその点については、イベントやテーマがないと交流しにくいという父親の回答にも表れている（図表8）。

加えて、子育てに関する情報収集機会という側面を評価する人や、妻や子どもなどとの家庭内コミュニケーションが活性化する点を指摘した人もみられた。

【父親の自由回答より一部抜粋】

■ネットワークの拡大とストレス解消

- ・「利害のない関係が増える」「仕事以外の付き合いができる」
- ・「話題が増える」「違う業種の知り合いが増える」
- ・「子どもがいなければ接することのないタイプの人と関係を持つことができるようになる」
- ・「近隣の人との交流が増える」「地元愛が芽生える」
- ・「飲みにいける」「飲み友達が増える」「快く飲みに行かせてもらえる」
- ・「愚痴を言ってストレスの解消」
- ・「子どものイベントに行く動機付けになる」「子どもたちから声をかけられる」

■趣味特技の能力発揮の機会創出

- ・「お互い手馴れたことを交換しあうことができる」
- ・「ゲーム好きという共通の趣味があったことで良いゲームを紹介してもらう」
- ・「一緒にスポーツができる」
- ・「アウトドアを通じて付き合うことが多く、活動の中で性格などが分かり合える」

■子育て関連の情報収集

- ・「育児について困った時相談できる」
- ・「学校の情報を共有できる」「年上の場合には色々アドバイスをくれるので助かる」

■家庭内のコミュニケーションの増加

- ・「子どもや妻と共通の知り合いが増えるので、家庭での話題が増える」
- ・「子どもとの会話をするきっかけができる」

注：原則として原文のまま抜粋しているが、文意を損ねない範囲で修正・集約した箇所がある

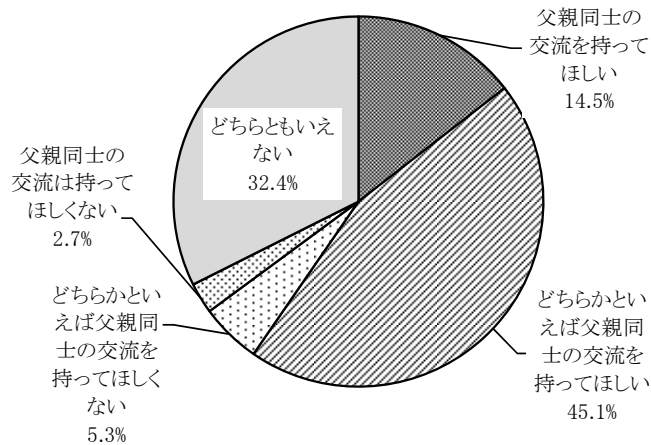
一方で、ネガティブな見解はポジティブなものよりも少なかった。主に「何を話せばよいかわからない」という、きっかけや話題の欠如が散見された。また、「年代が異なる」「経済状況が違う」「教育観が違う」といった意見も見られており、自分の状況と異なることによる付き合いにくさをあげる人がいた。職場での付き合いを中心とした人間関係のみを構築・維持してきた父親においては、自分と共通性が少ない対象に対する向き合い方に戸惑いを覚える人が少なくないようである。全体的に、ネガティブな意見の多くは、父親同士の交流自体のデメリットというより、うまく交流できない要因に関する意見が目立った。

4. 母親から見た父親同士の交流

一方、母親自身は父親同士が交流することに対してどのように考えているのだろうか。全体として「父親同士の交流を持ってほしい」と回答した人は14.5%、「どちらかといえば父親同士の交流を持ってほしい」と回答した人は45.1%で、約6割の母親は

父親にネットワークを持ってほしいと考えている（図表10）。「どちらともいえない」という回答が32.4%であるため、父親同士の交流を持ってほしくない人（「父親同士の交流を持ってほしくない」（2.7%）と「どちらかといえば父親同士の交流を持ってほしくない」（5.3%）の合計）は8.0%に過ぎなかった。

図表10 父親同士が交流することに対する母親の意識



父親ネットワークの構築について、母親の意見を自由回答でたずねたところ、以下のような意見がみられた。目立ったのは、父親自身に友人を増やしてほしいというものと、父親が他の父親と交流することでより子育てに関心を持ってもらいたいという2点である。自由回答では、父親の交流の幅が職場などに限定されていて多様性が低いことを懸念する母親の意見がみられる。また父親に対して、自分自身が楽しみながら子育てにかかわってほしいという母親側の意識もみられた。

【母親の自由回答より一部抜粋】

■父親自身の交流の幅の拡大

- ・「普段、ほとんどでかけないのでパパ友を作って積極的に遊びに行ってほしい」
- ・「旦那に友人ができることはいいことなので、もっと「パパ友」としてたくさん友人を作ってほしい」

■父親の間接的な子育て関与

- ・「もう少し育児に関心を持ってほしいので、パパ友を作ってほしい」
- ・「父親としての時間と責任を感じてくれる」
- ・「父親同士の交流の時間は、子どもとだけ向き合えるので常に行ってほしい」
- ・「地域に知り合いができて子どものことなど相談できるのがよい」

■娯楽性

- ・「親同士の飲み会やイベントができるので楽しい」
- ・「家族ぐるみの付き合いが深まることで、子ども同士の友情関係が確実なものとなる」

注：原則として原文のまま抜粋しているが、文意を損ねない範囲で修正・集約した箇所がある

5. 父親同士が交流することによる効果の可能性

(1) 父親自身への効果

以上の結果から、父親同士が交流することによる効果の可能性について、①父親自身への効果、②子どもへの効果、③母親（妻）への効果の側面からまとめる。

まず、父親自身への効果としてあげられるのは、交流の幅の拡大である。仕事上の人間関係が日常的な交流の中心を占める父親において、新たに仕事外のネットワークを構築する機会は多くない。趣味や余暇に時間や金銭を多く使うことが難しい子育て世代の男性にとって、子どもを介した交流は数少ない新しい交流発生の機会となる。

また、地域ネットワークの形成という効果も期待できる。退職後に地域活動をしたくても機会やきっかけがないという声を多々聞くが、子どもを介した父親同士の交流は、正に地域ネットワーク構築のチャンスでもある。単に自分の老後の関係構築という目的だけでなく、対人関係の構築・維持におけるスキルアップのためという意識で臨めば、たとえ今後転勤や転居で地域を動く可能性があったとしても、それらは決して無駄な行動であるとはいえない。

さらにこれに付随して、子育て関連で他の父親とかかわることは、業務上でも利点がある。様々なライフスタイルや立場の人に接触することは、今後働き方が一層多様化する中で、職場における子育て世代の男性や女性の理解促進につながる。実際にヒアリングでは、子育てそのものへの積極的な関与によって、子育てで感じる教育の苦勞やノウハウを部下育成に活かし、他方で部下育成上必要なスキルや研修成果を子育てに活かすことで、家庭と職場の双方にポジティブな効果をもたらすという、直接的な利点をあげる声も聞かれている。

(2) 子どもたちへの効果

子どもへの効果としては、父親同士が交流することで、父親と子どもが様々な状況下で接する機会が増え、子どもとのコミュニケーション機会が増すとともに、子どもへの関心の高まりと理解促進が期待できる。これにより子どもと父親の距離感が縮小し、時として希薄化しがちな父子関係の改善のきっかけともなるだろう。

また、核家族化が進んだことなどにより、現代の子どもは大人との交流頻度が減少している。通信メディアがパーソナル化したことによって電話の取り次ぎなどで親を介するケースも激減した。一人親世帯も増加している。こうした中、大人といえば母親と教師としか交流しない子どもも少なくなく、成人男性との接触機会が少ない子どもが多い。母子密着が指摘される現代において、父親が自分の子どもだけでなく他の子どもたちとも交流する機会を持つことは意義がある。父親が自身の子どもだけでなく他の子どもたちともかかわることで、子どもが多様な大人とかかわる機会が創出され、子どもたちのコミュニケーションスキル育成にプラスに作用すると考えられる。

(3) 母親への効果

父親が積極的に他の父親と交流することについては母親においてニーズがあることから、父親自身が自己のネットワークを多様化させつつ子育てを楽しむことにより、母親の満足感が高まったり、子育てストレスが軽減されるといった効果があると考えられる。また父親自身が、父親同士で交流することにより母親（妻）と共通の友人知人ができ、母親（妻）とのコミュニケーションが活性化する、関係がよくなるといった評価をしている点からも、母親へのメリットが期待できる。

6. おわりに

男性が子育てに関与することが当然となりつつある社会のなかで、男性の子育ては「しなければならない」行動としてとらえられてきた。そうした受身的な関与から一歩前進し、父親ならではの子育てや自分に合ったかかわり方を模索することで、より自分と家族の満足を高めることができると考えられる。その一つの形が、父親同士が交流しながら子どもや母親、さらには地域とかかわることである。子どもを介したコミュニケーションの機会がある人において、そのチャンスを積極的に活かすことには、様々な側面で意義があると考えられる。

交流やコミュニケーションは得手不得手もあり、個人のタイプや意識にも大きく左右されるものであるため、交流がストレス源になるケースもあるだろう。しかし、対人関係意識は人との交流を重ねることで大きく変化するものである。実際に人とかわり、最初はぎこちなくてもコミュニケーションを重ねることによってコミュニケーションを楽しめるようになるケースは少なくない。こうした交流を通じて、父親が従来とは異なる形での子育てを行うことは、「母親の代替」ではない独自の役割を発揮する機会となり、さらに自分（父親）だけでなく我が子や妻（母親）のニーズにも応じることができる可能性がある。

「父親の子育て」は、単に育児休業を取得したり、子育てに伴う介助や世話を担うことだけではない。父親の子育てが「母親の子育てのサポート」（宮木 2014）の域にとどまる限り、子育てが母親を中心に行われるという形態は変わらないだろう。子育てをきっかけとして自分や家族、さらには地域や社会の新たな可能性を探る発想が、これからの日本の「父親の子育て」において必要な視点なのではないだろうか。

（研究開発室 みやき ゆきこ）

【参考文献】

- ・ 第一生命経済研究所, 2014, 「40・50代の不安と備えに関する調査」報告書
- ・ 宮木 由貴子, 2014, 「父親の子育てに関する一考察」『Life Design Report』(Spring 2014. 4)
- ・ 宮木 由貴子, 2004, 「『ママ友』の友人関係と通信メディアの役割」『Life Design Report』(2004年2月号)